藤女子大学　国文学雑誌　総目次（第五十号～第九十八号）

第五十号　平成五年三月二十五日

札幌農学校学生・大石泰蔵の肖像
—夏目漱石と有島武郎の周辺—　山田　昭夫

日本民俗学とファシズム
—鶴見俊介への疑問から　村井　紀

前古代研究（11）アメリカ的［光景］とアジア性
…成人する映像視線…
『トム・ソーヤの冒険』と『浮雲』　青木　正次

藤村と東京
『熊野集』論—「花」の地平—　藪　禎子

『北海道帝国大学新聞』逸文録　種田和加子

源氏物語における先帝一族
—第二部〈先帝源氏〉を中心に—　小笠原　克

『平家物語』に見える末代と「不思議」　小山　清文

『六代勝事記』私注（一）　鈴木　智子

かぶき史論7　桜田治助・『大商蛭子島』（上）
…身体映像化表現への意志…　伊藤　敬

五十音図—その言語空間—　青木　正次

『名語記』における欠帖巻一の内容をめぐって　丸山　隆司

藤女子大学国文学雑誌　総目次　漆崎　正人

格成分として用いられる「もの」
—［単純用法］と［被修飾用法］—　揚妻　祐樹

第五十一号　平成五年十一月二十五日

前古代研究（12）『道草』続・漱石の帰還　青木　正次

「私」を照らす鏡—内なる他者と外なる自己—　岡部　泰子

かぶき史論8　桜田治助（下）・『伊達競阿国劇場』
…面相憑き・自己身体映像のアジア性…　青木　正次

『六代勝事記』私注（二）　伊藤　敬

小林多喜二評論索引　塚田　純子

平成四年度卒業論文題目

第五十二号　平成六年三月十五日

『雪たゝき』覚え書—花田清輝に倣って—　関谷　博

かぶき史論9　鶴屋南北・『東海道四谷怪談』1
—映像身体・肉体の自己表現へ　青木　正次

自己表出史論1『徒然草』劇的身体人の（ユマニスト）［登場］　青木　正次

北野克書写本『名語記』における

項目配列の第一基準をめぐって（中―その二）　漆崎　正人
平成五年度卒業論文題目

第五十三号　平成六年十一月二十五日

自己表出史論2　どう論ずるのか（1）・生命像の問題
　パラダイム重層論・表現としての自己と世界　青木　正次
『源氏物語』における藤氏の位相　藤田　ゆり
浮舟物語試論・二　浮舟物語と風景　北村　貴子
かぶき史論10　鶴屋南北・『東海道四谷怪談』2　青木　正次
〈風景〉の経歴（バックグラウンド）　丸山　隆司
高村光太郎の「オリエンタリズム」
　―その戦争詩における〝アジア〟について―　井浦しのぶ
鬼の霍乱―大朝雄二北大教授の急逝を悼む―　藤村　潔

第五十四号　平成七年三月十五日

かぶき史論11『勧進帳』
　生世話から本行へ　劇中劇の世界と演出の分化　青木　正次
『観画談』における恢復―露伴と都市―　関谷　博
自己表出史論3『仰臥漫録』
　食管的人間像・未開からの眺め　青木　正次
批評の消去（エリミナシオン）―志賀直哉「網走まで」―　丸山　隆司

第五十五号　平成七年十一月二十五日

『あらくれ』論―お島を軸に―　藪　禎子
『鳥呑み男』の自己表出史
　言語像としての［鳥］がさす人間生Ⅰ
　『ハウサ昔話』（未開性）から『今昔物語』（古代性）まで　青木　正次
モダニズムと蝶（てふ）　丸山　隆司
平成六年度卒業論文題目
連体修飾における主体の判定性について　揚妻　祐樹

第五十六号　平成八年三月二十五日

一葉と「世の中」　藪　禎子
『幻談』―終わりの作法―　関谷　博
『島木健作全集』逸文録　小笠原　克
恋愛主体の変奏―伊藤比呂美論―　種田和加子
もうひとりの〈家持〉たち
　―〈万葉集〉の生成①―　丸山　隆司
〈夕顔〉を読む―伊勢物語引用を基点として―　小山　清文
西行歌「なりけり」考　伊藤　敬
平家物語の叙述と構成
　その一「介在的・並行的叙述」　鈴木　智子
『鳥呑み男』の自己表出史Ⅱ

近代身体人から前現代影像人へ
能・狂言『ぬえ』『禁野』・近松『野守鏡』から　青木　正次
雨月物語『仏法僧』へ
朱子における程伊川「敬」説の受容
—「涵養須用敬、進学則在致知」をめぐって—　名畑　嘉則
古語の語義特定における一つの陥穽・
しかるべしさが支障となるとき
—『名語記』の〝義道〟の解釈を例として—　漆﨑　正人
コトとしての名詞概念と連体修飾構造　揚妻　祐樹

第五十七号　平成八年十一月三十日

相歓歌二首—〈万葉集〉の生成②—　丸山　隆司
明石一族と〈中務宮家物語〉
—源氏物語における〈政治〉のゆくえ—　麥谷　暁子
『鳥呑み男』の自己表出史Ⅲ　前現代・眼視線と理念光
北斎『富岳百景』論から一茶・春水・南北へ　青木　正次
梶井基次郎の世界　佐藤あゆみ
初期軍記に見る「落つ」の用法の検討
—『奥州後三年合戦絵詞』を中心として—　中嶋みゆき
平成七年度卒業論文題目

第五十八号　平成九年三月二十五日

六条院物語をめぐる視線の構造　高木　美和
増鏡私注　伊藤　敬
『鳥呑み男』の自己表出史Ⅳ　承前　前現代映像人
為永春水『春色梅暦』・鶴屋南北『東海道四谷怪談』論　青木　正次
一葉と世の中（二）　藪　禎子
キリシタン版国字本付載〝字集〟等付訓
総合索引Ⅰ（ア行）　漆﨑　正人
程頤における「公」の概念の諸相
—「仁之理」から「衆人之公論」まで—　名畑　嘉則
平成八年度卒業論文題目

第五十九号　平成九年十二月十五日

交友—〈万葉集〉の生成③—　丸山　隆司
『和泉式部日記』「ながめ」考　箱崎　薫
『封じ文』前後　関谷　博
『竹の木戸』論—真蔵の可能性・空白のその後—　藪田乃笛子
『鳥呑み男』の自己表出史Ⅴ　現代映像人の自己像表現
アジア性の超克力
夏目漱石『文鳥』から宮沢賢治『よだかの星』へ　青木　正次

『平家物語』における「死ぬ」ことを表すことばについて　尾田　紀子
キリシタン版国字本付載〝字集〟等付訓
総合索引Ⅱ（カ行）　漆﨑　正人

第六十号　平成十年三月二十五日

源氏物語における下二段助動詞「給ふ」　松本　瑛子
和歌韻律考（続）　伊藤　敬
論争する契沖―『和字正濫通妨抄』をめぐって―　丸山　隆司
『辻浄瑠璃』論―〈国会時代〉前期の露伴（上）―　関谷　博
『鳥呑み男』の自己表出史Ⅵ　現代機器映像人の終わり
大江健三郎『個人的な体験』・三島由紀夫『孔雀』まで　青木　正次
河童は覗く―道具としての小説『少年Ｈ』―　金山　昌代
李白「峨眉山月歌」について　名畑　嘉則
形式名詞文述部の「という」の挿入可能性について　揚妻　祐樹

第六十一号　平成十年十二月十五日

『いさなとり』論―〈国会時代〉前期の露伴（中）―　関谷　博
近代文学と仏教　下村　美穂
原民喜論　川村小百合
『鳥呑み男』の自己表出史Ⅶ　情報人間の知(1)
『カモメのジョナサン』と『ねじまき鳥クロニクル』　青木　正次
平成九年度卒業論文題目

第六十二号　平成十一年五月二十五日

和歌韻律考（完）　伊藤　敬
『五重塔』論―〈国会時代〉前期の露伴（下）―　関谷　博
『鳥呑み男』の自己表出史Ⅷ　情報人間の知(2)
『ねじまき鳥クロニクル』「繋がる」自己の化現世界　青木　正次
キリシタン版国字本付載〝字集〟等付訓
総合索引Ⅲ（サ行）　漆﨑　正人
平成十年度卒業論文題目

第六十三号　平成十一年十二月二十五日

〈他者〉の文学　丸山　隆司
『鳥呑み男』の自己表出史Ⅸ　情報人間の知(3)
『ねじまき鳥クロニクル』3　青木　正次
『我牢獄』の位置―『風流悟』との関連で―　関谷　博
キリシタン版国字本付載〝字集〟等付訓

総合索引Ⅳ（タ行）　漆﨑　正人

第六十四号　平成十二年七月三十一日

「鵤の嘴」後片付け　藤村　潔
桐壺更衣の〈遺言〉の意義
—源氏物語における〈女〉の〈声〉—　小山　清文
偶像の逆襲—泉鏡花『外科室』の問題性—　種田和加子
『努力論』『修省論』覚え書　関谷　博
モダン・マルクス主義のシンクロニシティー
—平林初之輔とヴァルター・ベンヤミン その1　菅本　康之
〈他者〉の言語
—知里幸恵『アイヌ神謡集』《序》文をめぐって—①　丸山　隆司
生命の自己表出史
多層自己論（日本文学に読む）1原論　青木　正次
〈やおい小説〉におけるセクシャリティの位相　永久保陽子
キリシタン版国字本付載〝字集〟等付訓
総合索引Ⅴ（ナ行）　漆﨑　正人
平成十一年度卒業研究（論文）題目
時枝誠記の「場面」と森重敏の「言語場」（1）
—分節的レベルにおける「心的態度」—　揚妻　祐樹

第六十五号　平成十三年三月二十五日

モダン・マルクス主義のシンクロニシティー
—平林初之輔とヴァルター・ベンヤミン その2　菅本　康之
キリシタン版国字本付載〝字集〟等付訓
総合索引Ⅵ（ハ行）　漆﨑　正人
生命の自己表出史2　食生論1　青木　正次
〈小特集　アイヌの表象〉
『雪紛々』について　関谷　博
知里幸恵の背景を探る　富樫　利一
アイヌの表象
—「北海道旧土人保護法」以前と以後—　丸山　隆司

第六十六号　平成十三年十二月二十五日

源氏物語蜻蛉巻の降雨　藤村　潔
生命の自己表出史3　食生論2
未開食生のアジア的変容　青木　正次
挫折するリアリズム、虚構の誘惑
—島尾敏雄「贋学生」論　鈴木　直子
石川達三論—『生きている兵隊』を中心に—　角田　友美
〈物語〉は誘惑する—小川洋子論序説—　片岡ふみ子
キリシタン版国字本付載〝字集〟等付訓

総合索引Ⅶ（マ行）　漆﨑　正人
平成十二年度卒業研究（論文）題目

第六十七号　二〇〇二年七月二十五日

生命の自己表出史4　食生論3『古事記』　青木　正次
源氏物語蜻蛉巻の降雨・補記　藤村　潔
『公宴続歌』錯簡・年時考　伊藤　敬
百鬼夜行絵巻諸本を読む　河口絵里奈
『終りし道の標べに』改稿過程をめぐって　竹田　志保
キリシタン版国字本付載〝字集〟等付訓
総合索引Ⅷ（ヤ～ワ行）　漆﨑　正人
二〇〇一年度卒業研究（論文）題目

第六十八号　二〇〇二年十二月二十五日

「遊宴の花」―額田王の位相―　丸山　隆司
アジア性研究・母界論1
「日本」という〔自己〕からの自由
文学表現にみる二一世紀の動き　青木　正次
モダン・マルクス主義のシンクロニシティー
―平林初之輔とヴァルター・ベンヤミン その4―　菅本　康之
物語の解体／解体の物語
―une ésquisse pour kénji nakagami―　櫻井　進

第六十九号　二〇〇三年七月二十日

アジア性研究・母界論2　アジア性の論とはなにか（上）
原論からオオゲツ・ハイヌウェレへ　青木　正次
源氏物語の対称的あべこべ　藤村　潔
空虚なる〈故郷〉―「戦友」・啄木・「故郷（ふるさと）」―　丸山　隆司
モダン・マルクス主義のシンクロニシティー
―平林初之輔とヴァルター・ベンヤミン その5―　菅本　康之
江國香織論　池田真奈美
二〇〇二年度卒業研究（論文）題目

第七十号　二〇〇四年二月二十日

「死出の山」を越えて行く人たち
―西行の歌のことばと宗教活動―　平田　英夫
「島の青草」―折口信夫の戦争・沖縄―　丸山　隆司
森茉莉『恋人たちの森』論
―パロディとしての〈同性愛〉表象　上戸　理恵

第七十一号　二〇〇四年七月二十五日

〈読み〉の政治（ポリティクス）　丸山　隆司
アジア性研究・母界論3　図像にみる母界の来歴と展開
「知の三角」・生命の弁証法をふまえて　青木　正次
モダン・マルクス主義のシンクロニシティー
―平林初之輔とヴァルター・ベンヤミン　その6―
二〇〇三年度卒業研究（論文）題目　菅本　康之

第七十二号　二〇〇五年三月二十五日

アジア性研究・母界論4
『曾根崎心中』・風俗理念語りの転倒と自然身体映像　青木　正次
泉鏡花『黒猫』論―立ち上がる怪異―　高橋さおり
「大東亜帝国」への「行路」
―『暗夜行路』をめぐって―　丸山　隆司
書評　丸山隆司著『古代日本文学と文字』　松田　浩
書評　大石悦子、種田和加子、揚妻祐樹
『コントラテクスト論―con/text の〈中で／中から／中へ〉人称／声は行為（アクト）となるか―』　桑野　隆

第七十三号　二〇〇五年七月二十五日

【自己】組織化する言葉・生命(1)
『伊勢物語』初段による【デジタル読み】の試み　青木　正次
「海行かば」―万葉の〈近代〉―　丸山　隆司
二〇〇四年度卒業研究（論文）題目

第七十四号　二〇〇六年三月二十五日

貫之歌から芭蕉句と西鶴・近松の史的表現位相へ
【デジタル読み】の原理と自己組織化、
スモールワールド像　青木　正次
源氏物語における〈雨夜の品定め〉の意義　小山　清文
極楽浄土思想と戯咲歌・俳諧歌
―増賀から瞻西、そして俊頼へ―　平田　英夫
亡霊としての江戸　泉鏡花論　種田和加子
向島蝸牛庵（上）―中川と露伴―　関谷　博
「海行かば」―万葉の〈近代〉―Ⅱ　丸山　隆司
日本は、いったいどこと戦争をしたのか。
―「徴候」としての『少年H』―　菅本　康之
「白髪三千丈」について　名畑　嘉則
字音語「ぢゆうきよ（住居）」成立考　漆崎　正人
条件表現から見た「語り口」の問題
―三遊亭円朝の人情話速記本を資料として―　揚妻　祐樹

第七十五号　二〇〇六年九月二十五日

倉橋由美子の反世界
—初期作品『パルタイ』『夏の終り』を読む—　島田　綾香

〈特集　鳩沢佐美夫〉

〈位置(position)〉について—鳩沢佐美夫論にむけて—　丸山　隆司

赤きもののような現象と赤い風船　盛　義昭

鳩沢佐美夫の最初の日記について　木名瀬高嗣

＊資料＊

鳩沢佐美夫日記Ⅰ（大学ノート）

鳩沢佐美夫日記Ⅲ（カレンダー）

二〇〇五年度卒業研究（論文）題目

第七十六号　二〇〇七年三月二十五日

「月の前」論—秋成の隠者観と西行—　山本　綏子

映画(シネマ)のなかの「海行かば」—Ⅰ—　丸山　隆司

書評　関谷博『幸田露伴論』　出口　智之

〈特集　鳩沢佐美夫〉

〈善意〉の落ち穂
—鳩沢佐美夫の作品・遺稿集の成立、および鳩沢佐美夫日記（一九六一年）の周辺—　木名瀬高嗣

＊資料＊

鳩沢佐美夫日記Ⅱ（手帳）

第七十七号　二〇〇七年十二月十日

古代の地理観〜神武東征の構造〜　田内　沙織

西行『聞書集』の地獄歌をめぐる一試論　平田　英夫

炸裂する意識のかなた
—現代文学のトランス表象の可能性　種田和加子

二〇〇六年度卒業研究（論文）題目

第七十八号　二〇〇八年三月三十日

「海行かば」—万葉の〈近代〉—Ⅲ　丸山　隆司

『天草版伊曾保物語』における待遇表現の一問題
—鶴に対しての、エソポの特異な待遇表現をめぐって—　漆﨑　正人

教材研究　幸田文「あとみよそわか（抄）」
—〈学び〉の体験—　関谷　博

第七十九号　二〇〇八年十一月三十日

中井甃庵『とはずがたり』を読む
—懐徳堂官許獲得運動の一側面—　山本　綏子

キリシタン版『どちりいな・きりしたん』における〝御座ます〟をめぐって　漆﨑　正人

尾崎紅葉『多情多恨』の語りと語法（1）
—語りの性格—　揚妻　祐樹

二〇〇七年度卒業研究（論文）題目

第八十号　二〇〇九年三月三十日

〈源氏物語小特集〉

『源氏物語』における字音語―紫上の場合―　漆﨑　正人

六条院・三条宮物語における〈継子・二人妻譚〉と〈平中〉引用
―雲居の雁・玉鬘をめぐって―　小山　清文

後宮―封じられた嫉妬―　丸山　隆司

『藤簍冊子』源氏物語和歌注釈稿（上）　山本　綏子

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

内田百閒「サラサーテの盤」論
―モダニティ・知覚・主体―　山田　桃子

花田清輝ルネッサンスにむけて―生誕一〇〇年　菅本　康之

第八十一号　二〇〇九年十一月三十日

『藤簍冊子』源氏物語和歌注釈稿（中）　山本　綏子

「海行かば」―万葉の〈近代〉―Ⅳ　丸山　隆司

キリシタン版漢字辞書の書名をめぐって
―『落葉集』、その書名に対する疑問―　漆﨑　正人

十返舎一九の化物系草双紙について　松山　美加

二〇〇八年度卒業研究（論文）題目

接客場面におけるイントネーション
―コンビニの接客を中心に―　蔵本　夏実

言語資料として見た大隈重信の演説
「憲政に於ける輿論の勢力」（1）
―SPレコードと速記の紹介―　揚妻　祐樹

第八十二号　二〇一〇年三月三十日

西行和歌の原風景についての一試論
―遊女・歩き巫女・比丘尼の歌文化との関わりをめぐって―　平田　英夫

『藤簍冊子』源氏物語和歌注釈稿（下）　山本　綏子

【研究ノート】民話・伝説のポストコロニアリスム　丸山　隆司

岩井茂樹著『日本人の肖像　二宮金次郎』を読んで　関谷　博

キリシタン資料における
〝存知〟、〝そんぢ〟、“zongi”について　漆﨑　正人

二〇〇九年度日本語・日本文学科卒業研究（論文）題目

第八十三号　二〇一〇年十一月三十日

「海行かば」―万葉の〈近代〉―Ⅴ　丸山　隆司

『源氏物語』における雲居雁造型の意義
―母親としての攻防―　萩野こず枝

泉鏡花『陽炎座』再考―鎮魂の様式性―　種田和加子

露伴の〝生誕地・その他〟補訂　関谷　博
キリシタン資料における〈愛〉の表現の一問題
—「に対して」と〈精神的相互愛〉の関係をめぐって—　漆崎　正人

第八十四号　二〇一一年三月三十日

尾崎紅葉『多情多恨』の語りと語法（2）
—ノデアル文体—　揚妻　祐樹
キリシタン資料と「れいちやう（霊長）」
—キリスト教的人間観との関わりをめぐって—　漆崎　正人
樋口一葉と露伴小説『風流微塵蔵』　関谷　博
二〇一〇年度日本語・日本文学科卒業研究（論文）題目

第八十五号　二〇一一年十一月三十日

『日葡辞書』における「たいせつ（大切）」の類義語について　漆崎　正人
水哉子巻之上譯注（その一）　名畑　嘉則
日韓におけるオノマトペ運用の諸相　阿部友加里

第八十六号　二〇一二年三月三十日

落窪の君と阿漕の成長・
出世譚としての『落窪物語』　井上真梨子
『羅葡日対訳辞書』におけるCaritasの項目をめぐって
—charidade,amor,「たいせつ」「こんせつ」のありよう—　漆崎　正人
水哉子巻之上譯注（その二）　名畑　嘉則
二〇一一年度日本語・日本文学科卒業研究（論文）題目

第八十七号　二〇一二年十一月三十日

〈特集　台湾の日本語文學—一九三〇年代を中心に—〉
台湾教育会編『國光』について　揚妻　祐樹
台湾のプロレタリア文学
—楊逵「新聞配達夫」と呂赫若「牛車」を中心に—　横路　啓子
短歌と異族—台湾—　丸山　隆司
〈模倣〉という遊び　横路　明夫
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
加藤景範論—『蔵山集』における小沢蘆庵との関わりを中心に—　金子　理絵
『羅葡日対訳辞書』における
「こんせつ（懇切）」の現れ方をめぐって　漆崎　正人

第八十八号　二〇一三年三月三十日

【研究ノート】『万葉集』にはなにが書かれているのか　丸山　隆司

橘千蔭の堂上歌壇観
―『妙法院宮へ奉れる和歌』を中心に―　高橋　枝里

日本近代文学成立期における〈政治的主題〉
―『京わらんべ』から『浮雲』へ―（上）　関谷　博

キリシタン資料における下二段活用動詞〝アイツク〟について　漆﨑　正人

二〇一二年度日本語・日本文学科卒業研究（論文）題目

第八十九号　二〇一三年十一月三十日

名の孤独―「バチェラー・八重子」小論―（上）　丸山　隆司

日本近代文学成立期における〈政治的主題〉
―『京わらんべ』から『浮雲』へ―（下）　関谷　博

泉鏡花「月下園」と百貨店広報誌の着物　乾　淑子

川端康成「みづうみ」論　赤坂かおり

続・キリシタン資料における
下二段活用動詞〝アイツク〟について　漆﨑　正人

第九十号　二〇一四年三月三十日

名の孤独―「バチェラー・八重子」小論―（下）　丸山　隆司

あづま路の道の果てより出でし月影
―鹿島社の神祇歌をめぐって―　平田　英夫

秋成と春雨　山本　綏子

北村透谷と運動会　関谷　博

平野啓一郎『決壊』論
―試される言葉、邪悪さの所在―　種田和加子

詩語「風箏」について　名畑　嘉則

宗教書系キリシタン資料における恋愛表現をめぐって
―「こひ（―）」「こふ」「こひし」及び「恋（れん）―」の場合―　漆﨑　正人

「お店がやっていない」
―現代日本語における助詞ガへの交代現象―　揚妻　祐樹

第九十一・九十二合併号　二〇一五年三月三十日

『日本霊異記』下巻第十九縁の構成と成立
―「産み生せる肉団の作れる女子」は、なぜ「女子」なのか―　水口　誠記

幸田露伴と小説
―松浦寿輝著『明治の表象空間』にふれつつ―　関谷　博

「霧社蜂起事件」をめぐる言説（ディスクール）（1）　丸山　隆司

教外書系キリシタン資料における恋愛表現をめぐって
―「こひ」系語彙の場合―　漆崎　正人

二〇一三年度日本語・日本文学科卒業研究題目

第九十三号　二〇一五年十一月三十日

キリシタン資料と「おんあい（恩愛）」
―キリシタン資料における「あい（愛）」の一考察として―
漆崎　正人

京都大学人文科学研究所蔵『天地瑞祥志』翻刻・校注
―「第一」の翻刻と校注（一）―
水口　幹記・田中　良明

〈小特集・幸田露伴〉

幸田露伴の〈国民〉
―『土偶木偶』と『普通文章論』―　関谷　博

『普通文章論』に見る幸田露伴の文章観　揚妻　祐樹

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

道南・南茅部地区の昆布漁に関する生活語彙の研究
中村　円香

二〇一四年度日本語・日本文学科卒業研究題目

第九十四号　二〇一六年三月三十日

『二日物語』と『封じ文』
―露伴小説における悟達と情念―　関谷　博

外来語「カルタ」成立の周辺
―『日葡辞書』とcarta―　漆崎　正人

京都大学人文科学研究所所蔵『天地瑞祥志』翻刻・校注
―「第一」の翻刻と校注（二）―
水口　幹記・田中　良明

尾崎紅葉の文章観
―〈隠形〉と〈顕形〉の狭間で―　揚妻　祐樹

第九十五号　二〇一六年十一月三十日

学人　露伴―（一）雅号―　関谷　博

外来語「カルタ」の成立をめぐって
―『羅葡日対訳辞書』とcarta―　漆崎　正人

肉声の語り
―尾崎紅葉『伽羅枕』における「発話」「心話」「地」の処理―
揚妻　祐樹

二〇一五年度日本語・日本文学科卒業研究題目

第九十六号　二〇一七年三月三十日

近世の『源氏物語』巻名和歌
—冷泉為村を中心に—　山本　綏子

キリシタン語学書における
ポルトガル語接続詞 ou の職能について　漆﨑　正人

偶然確定条件から見た二葉亭四迷の文章　揚妻　祐樹

第九十七号　二〇一七年十一月三十日

国語科教育法に向けて
教材研究1［中学編］魯迅『故郷』—「紺碧の空に金色の丸い月」—
教材研究2［高校編］漱石『夢十夜』—「第一夜」と「第六夜」の学習—　関谷　博

安部公房『壁』論　佐藤早希子

翻刻　キリシタン版『さるばとる・むんぢ』　漆﨑　正人

〈語り〉と語彙
—二葉亭四迷訳「あひゞき」初訳・改訳間の自立語対照—　揚妻　祐樹

二〇一六年度日本語・日本文学科卒業研究題目一覧

第九十八号　二〇一八年三月三十日

夏目漱石『夢十夜』論
—〝ひとつの物語〟として—　関谷　博

高橋たか子『亡命者』論
—「プスチニア」をめぐって　種田和加子

戦争の記憶／記憶の戦争
—奥泉光「石の来歴」論　前編（構造主義的分析）　菅本　康之

キリシタン資料における「じあい（慈愛）」について　漆﨑　正人

書道科教育法の改善の方向に関する一考察　押上万希子

〈語り〉と文法—文章研究のために—　揚妻　祐樹